

Title	<原典翻訳>スーフィズム・アンソロジー・シリーズ4: クシャイリー 『クシャイリーの論攷』より「聖者の奇蹟」章 解題・翻訳ならびに訳注
Author(s)	東長, 靖
Citation	イスラーム世界研究 : Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies (2011), 4(1-2): 551-553
Issue Date	2011-03
URL	https://doi.org/10.14989/154005
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

クシャイリー『クシャイリーの論攷』より「聖者の奇蹟」章 解題・翻訳ならびに訳注

東長 靖*

1. 解題

前回は、古典理論が整理される時代を取り上げ、理論書と列伝について解説した。古典理論には、靈魂論・修行論などが含まれるが、ほかに聖者論も大きなトピックのひとつに数えられる。今回および次回は、この聖者論に焦点を合わせて紹介したい。今回取り上げるクシャイリーおよび彼の『クシャイリーの論攷』については、前稿ですでに紹介したので、この解題では繰り返さない。

イスラームにおける聖者論は、スーフィズムだけが担ったものではないが¹⁾、スーフィズムが特異な聖者論を展開したことも事実である。その概要を以下に述べる。

スーフィズムの聖者論は、クルアーンに登場する「ワリー」([神の] 友 walī [Allāh]) という概念をめぐって展開される。イスラーム諸学でもワリーの概念は認められているが、スーフィズムにおいては、ムスリムの中の選良であるスーフィーの中で、さらに合一体験にまで到達し得た真の選良として描かれる。9世紀後半以降、少なからぬスーフィーがワリーについて語ってきた。

その要素は、以下の4点に整理することができる。第1に、神の恩寵によって、ワリーは奇蹟(カラーマート *karāmāt*) を行うことができるということである。本稿は、この聖者の奇蹟の問題に焦点を合わせている。イスラーム思想において、この奇蹟の存在が広く認められていたことは重要である。奇蹟を認めない数少ない例外はムウタズィラ学派である。奇蹟という用語、イスラームの「理論」と乖離したフィールドの「実態」に還元してしまう傾向があるが、イスラーム学が基本的に奇蹟を正統信条としてきたことは再確認しておく必要があるだろう。スーフィズムでは、この奇蹟をワリーの特徴として強調する方向性と、それは神と合一し、神の知を体得した結果に過ぎないとして、むしろ真知(マアリファ *ma'rifa*) の方を強調する方向性の二つがあった。ちなみに、預言者の奇蹟はムウジザ *mu'jiza* もしくはアーヤ *āya* と呼ばれ、ワリーの奇蹟とは峻別されるのが常である。

第2に、ワリーと預言者(ナビー *nabī*) の関係も重要なトピックであった。これに関しても、ワリーと預言者の相違を強調し、預言者の優位を説く方向性と、両者の類似性・連続性を強調し、そのうえで聖者性が預言者性よりすぐれると説く方向性の二つがあった。神学のワリー論も、この関係性に注目しており、そこでは当然、前者の方向性が強調される。神学のワリー論は、預言者論の優越性の証明を強化するために説かれた側面もあると考えられる²⁾。

第3に、シャリーアとワリーとの関係も問題となった。ここでも、聖者はシャリーアに敬意を払い、あえて反することはしない、という方向性と、聖者は一般の人より高い次元におり、シャリーアを守る必要はない、という方向性とが、しばしば拮抗した。後者の立場をとる場合には、法学者との間の大きな論点となった。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 拙稿「イスラームの聖者論と聖者信仰——イスラーム学の伝統のなかで——」赤堀雅幸編『民衆のイスラーム—スーフィー・聖者・精霊の世界』山川出版社、2008年4月、13-39頁参照。

2) 神学のワリー論についてはたとえば、丸山大介「初期マートゥリーディー学派におけるワリー論」『イスラーム世界研究』第1巻第1号、2007年、125-134頁参照。

第4に、ワリーのヒエラルキーが論じられた。その区分の仕方には諸説あるが、ヒエラルキーの存在そのものはスーフイズムでは広く認められた。たとえば、11世紀のフジュウィーリー al-Hujwīrī (d. ca 1072) は、ワリーのヒエラルキーを次の6段階に整理している。最下層に選良 (akhyār. 300人) がおり、そこから一つずつ位階があがって、補佐人 (abdāl. 40人)、篤信者 (abrār. 7人)、楔 (awtād. 4人)、指導者 (nuqabā' 3人)、最後に枢軸 (qutb) もしくは助け手 (ghawth) (1人) に至る。上の位階の者が死ぬと、一つ下の位階の誰かが昇格すると考えられており、常にワリー全体の数は一定に保たれていることになる。

2. 翻訳ならびに訳注

訳出にあたっては、Abū al-Qāsim 'Abd al-Karīm b. Hawāzin al-Qushayrī, *al-Risāla al-Qushayriyya*, waḍa'a ḥawāshiyā-hu Khalīl al-Manṣūr, Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmīya, 1998(1418), p. 378 を底本として使用し、あわせて、次の英訳・トルコ語訳を参照した。

A. Knysh (tr.), *al-Qushayri's Epistle on Sufism: al-Risala al-Qushayriyya fi 'Ilm al-Tasawwuf*, Reading, U.K.: Garnet Publishing, 2007.

Abdulkerim Kuşeyrî, *Kuşeyrî risâlesi*, trans. Süleyman Uludağ, İstanbul: Dergâh Yayınları, 1978.

以下の略語を用いた。

【讚】「讚えあれ」(Subhāna-hu)

翻訳

アブー・アル=カーシム [・アル=クシャイリー] 師は言われた。

「諸々の奇蹟 (karāmāt) が聖者 (awliyā') に現れるというのは、認められるべきことである。」

それが認められるべきことであるという証拠は、以下の通りである。[確固とした論証や根拠に基づかない] 想像上の [たわごとのような] 事柄 (amr mawhūm) が知性の中に生起するということは、それが [実際に] 起こるとしても [イスラームにとって重要な] いずれかの原則を満たすことにつながらない。[これに対して] 彼 [アッラー] 【讚】があるものを生み出す力で属性づけられることは必然であり、[そのもの] の存在がアッラー 【讚】にとって命じられたものであってみれば、それが生起することの可能性を否定するものは何もないからである。

奇蹟の現れは、心的状態において [奇蹟が] 現れる [すぐれた] 人の誠実さ³⁾ の印である。誠実でない人に、[奇蹟] に類するようなことが現れることはありえない。それを示すのが、永遠なるお方 (al-Qadīm) [であるアッラー] 【讚】が [一介の凡人である] 我々に [奇蹟について] 教えたもうた結果我々が、心的状態において誠実である人と、論証によって価値のないものとされるような人とを区別することができるなどということ、想像上の [たわごとのような] 事柄 [にすぎない] ということである。こういった [アッラーに奇蹟について教えられるという] ことはただただ、その主張においてありもしないことを言い立てるような者 (muftarī) には存在しないような [立派な] ものを聖者 (walī) がとくに特質として与えられているということによるのである。[したがって我々のような凡人に望むべくもない。] そういったものが、すでに我々が述べた奇蹟なのである。

3) ṣidq. 真実性と訳すこともできるかもしれない。トルコ語訳は、正しいこと、正しいことを言うこと、などと訳している。

この奇蹟こそがまさしく、義務賦課〔に基づく因果律が当然〕の日々 (yawm al-taklīf)⁴⁾ において慣行を破壊する行い、心的状態において誠実な者と認めるという意味における聖者性という性質を持つ人に起こる行いに他ならないのである。

人々は、[聖者の] 奇蹟 (karāmāt) と、真理の徒 (ahl al-ḥaqq)⁵⁾ の奇蹟 (mu'jizāt) の間の区分を語ってきた。アブー・イスハーク・イスファラーイニー師⁶⁾ ——アッラーが慈悲をたれたまいますように——は次のように言っておられた。

[真理の徒の] ムウジザートは、諸預言者の誠実さの印 (dalālat) であり、預言者性の徴 (dalīl) は預言者以外の者には存在しない。それはちょうど、完璧なる理性が、[その理性] が [その持ち主] に属するという点において知者にとっての徴であるがゆえに、知者でない者には存在しないということと同様である。

また、次のように言っておられた。

聖者には、祈り (du'ā') に答えるといった類のカラマーとがあるものだ。他方、預言者のもつムウジザートであるような種類のものには、それはない。

またアブー・バクル・イブン・フーラク師⁷⁾ ——アッラーが慈悲をたれたまいますように——はといえば、次のように言っておられたものだ。ムウジザートとは、誠実さの印であり、その持ち主が預言者性を主張するなら、ムウジザートが彼の誠実さを証する、と。また彼の論攷においては、その持ち主が聖者性を示すなら、ムウジザはその状態における彼の誠実さをすでに示す。それゆえ、[このムウジザは⁸⁾] ムウジザートの一種に属するものであっても、違いのゆえに、[カラマー] と呼ばれ、「ムウジザ」とは呼ばれないのである。

4) 英訳者 Knysch は、人間に義務が賦課されている日々、すなわち現世を指すと看する。

5) ここでは、諸預言者を指すものとする。この文に関しては、本文で提示した以外に、次の2通りの解釈が可能である。第一は、「真理の徒の」の部分で、mu'jizāt だけでなく karāmāt にもかける読み方であり、この場合、「真理の徒」とは聖者・預言者を含むような存在と考えることになる。第二は、「真理の徒の」の部分で「人々」にかける読み方であり、トルコ語の翻訳 (Abdulkerim Kuşeyri, *Kuşeyri risâlesi*, trans. Süleyman Uludağ, İstanbul: Dergâh Yayınları, 1978, p. 533) はこの解釈をとっている。トルコ語の翻訳では、「真理の徒であるウラマーの内のある人々は」として、「真理の徒」を「ウラマー」を指すと考えている。

6) アシュアリー学派神学者、シャーフィイー学派法学者。イブン・フーラクと並んで、11世紀半ばのニーシャープールにおけるアシュアリー学派の代表的人物。1027年没。

7) アシュアリー学派神学者。941頃生。バーキッラーニー、イスファラーイニーと共にアシュアリー学派神学を学ぶ。1015年没。

8) トルコ語訳 (*loc. cit.*) は、直前の ḥāl (状態) を主語と考えている。